

昭和三十三年度
 眞宗同學會大會研究發表要旨

三願轉入に就て

廣瀬 泉

三願轉入の文に就ては從來から之を宗祖に於ける入信の歷程を物語るものであると見て、それが宗祖の生涯の何時に當るものであるかと云う如き考究が盛んに行われた。然しこうした立場に於て三願轉入の文を理解しようとする處から、それが後序の「建仁辛酉曆乘_二雜行_一兮歸_三本願_二」の文と撞着するかの如く考えられ、そのため種々の會通も行われた。

然し三願轉入の文は決して單なる入信過程若くは信仰生活に於ける回顧の記録に止まるものではなく、そこに眞宗教學の依つて立つべき根源の世界が開示されているのである。宗祖は後序に於て自記された如く、法然の選擇本願念佛の教に遇うて雜行を捨て、本願念佛に歸した。ここに宗祖の生涯に於けるただ一回の廻心がある。こうした捨雜歸正と云うことは人間にとり空前絶後の出來事であり、それは人間が變革されることである。ここに教を聞く處に成り立つ聞信一念の場がある。即ち就人立信である。三願轉入とはその稀有なる聞信の一念成就の現實を内觀自省する處に見開られた信の内景を語るものである。信卷別序には「夫以獲_二得信樂_一發_二起自_三如來選擇願心_二」と説かれている。然し信が願より生ずると云うことをは、具體

的に如何にして自證することが出来るであろうか。その自證の相を語るものが三願轉入である。即ち信が願より生ずると云うことは、聞信の一念の内觀によりその根源に久遠來働き給う大悲招喚の本願に遇う處に證知されることである。我々は一般的には本願があつてそれが信一念として成就すると考へるが、それは道理としてのみ云われることであつて、具體的な信の現實としては一念の信の成就に立つ處に、その内觀を通して本願に遇うのである。一念の信を内觀せしむるものはその信自體が新しく見出した人生の現實相であろう。それ故信が願より生ずると云うことは、具體的には願が信により證知せられることの外にはない。この一念の信の内深くにありて大悲招喚の本願に遇い、そこにその本願の御もようし(廻向)により今日(難_レ遇今得_レ遇)あらしめられた自らの無始以來の機相を深信せしめられ、益々信は願より生ずると云う他力廻向性を領受する。これが三願轉入の内景である。それ故三願轉入は一面に本願攝取の様相として十八願から廿願十九願への轉出が示され、同時に一面にはその願海中に「かねてしろしめ」されてあつた「煩惱具足の凡夫」たる「親鸞一人」の機相として十九願廿願十八願の機の轉入が語られているのである。眞宗教學の大地をなす本願力廻向の教義の具體的な意義も、こうした三願轉入の領解を通じては明らかとならぬのではないであろうか。

淨土義の立場から見た維摩經について

橋本芳契